

# 働きつつ学び研究する意義と展望一次の半世紀に向けて

十名直喜

## 1 はじめに

半世紀を経てのリバイバル版「働きつつ学び研究することの意義と展望」を、21世紀版として提示したい。本題名の随筆（無署名）が、大工業論文とともに1973年の『経済科学通信』7号に掲載された。製鉄所3年目、25歳の時の作品である。

いろいろな産業・地域の職場で働く人たちが、自主的・主体的に学び研究することの意義を考察し展望したものである。「働きつつ学び研究する」というキーワードは、基礎研のリーダーたちに深く受けとめられ、基礎研の理念にも反映される。

この半世紀の歩みは、試行錯誤と激動に満ちた挑戦であったといえる。この理念を体現された多くの逸材、働きつつ学ぶ研究者（約3桁）を育ててきた。本冊子の中核をなすのは、その内の10人が執筆された「仕事と研究の二刀流の経験とノウハウ」である。

筆者自身も、働きつつ学ぶ研究者の1人である。1971年に大学を卒業し鉄鋼メーカーで21年、基礎研にて半世紀（1973～）。その間に、企業や大学など4度の転身をとげてきた。1987～91年には京大大学院でも学び、1992～2019年の27年間、名古屋学院大学にて研究教育に携わり、定年退職後は自宅にてネットを中心に働学研を展開している。

職場や年齢、経験などの変遷を通して、仕事や立場、役割は変わる（流行）も、変わらぬもの（不易）がある。働きつつ学び研究するという人生スタイルである。25歳の立志は、半世紀を通して種々の試練を経て実りと次世代への継承の季節を迎えている。

小論が、この半世紀をふり返り、次の半世紀の道筋を照らす一助になれば幸いである。

## 2 基礎研の原点と理念

### 2.1 基礎研の原点とわが出発点

1968年10月、①憲法を暮らしに生かす運動、②労働者と知識人の同盟、③『資本論』学習の伝統を掲げ、経済学基礎理論研究所が創立された。今日の基礎経済科学研究所（略称、基礎研）に改称されたのは、1975年3月のことである。

基礎研は、①労働者研究者（100人）育成、②現場研究 + 古典の結合、③生活感覚あふれる経済学の創造という「3つの柱」を軸に、「働きつつ学ぶ」理念を掲げ、夜間通信研究科を開設した。2015年には、「働きつつ学び研究する」理念へと深化する。

労働者（社会人）と大学人が連帯し、学びあい育ちあう。それを通して、生き生きした現実感覚と基礎理論の結合を図り、現場研究と古典研究の結合を通して、生活感覚あふれる経済学を創造していく。「働きつつ学び研究する」は、そのような道筋と展望を凝縮し理念として提示したものである。その本質を見事に言い当てている一句が、「労働は生命のランプ

に油を注ぎ、思考はそれに火を点ずる」(ジョン・ベラーズ)である。「思考」には、「学ぶ」「思う」「研究する」が内在している。それらと労働の結合こそ、働学研の神髄に他ならない。それを、『資本論』第1巻の中に発見したのは、わが25歳の時である。

1971年春、大学を卒業して鉄鋼メーカーに入り製鉄所に配属されて2年が過ぎたばかりの1973年春、転機が訪れる。大阪で森岡孝二氏が主宰する経済学基礎理論研究会に参加する。研究会での活発な議論は、わが問題意識を掘り起こし、研究意欲に火をつける。1人で悶々と抱えていた種々の疑問やテーマをぶっつけて議論することができたからである。

数ヶ月で最初の論文「大工業理論の一考察(上)」を書き上げ、随筆「働きつつ学び研究することの意義と展望」(無署名)とともに、1973年秋『経済科学通信』7号に掲載される。

随筆(十名[1973])は、労働者研究者像と育成のあり方について、次のように提起する。その労働者研究者像は半世紀を経た今も斬新で、21世紀的なあり方を示唆している。

「共同研究を通して、労働者の中に研究者・書き手を育成し、諸産業分野の労働者が自らの手で内在する諸問題を解明し、政策化し、積極的に組織していく力量をも形成する」

## 2.2 「働く」「学ぶ」「研究する」の歴史的な意味と関係

1960-70年代前半の「労働」「学習」観は、上下的・一方向的な傾向がみられた。

それに対し、「働く」「学ぶ」「研究する」として主体的に捉え直し、新たな視点から光をあてたのが、十名[1973]である。「働」「学」「研」を有機的に結合して、「働きつつ学び研究する」とし、「現場」と「研究」の新たな結合を図ったものである。

「学ぶ」とは何か。「学ぶ」ことがどのような意味を持つのか。それらを主体的に捉え直すのが、学んだことを「思う」である。さらに「研究する」は、実践・検証・思索を通して、学んだことを根底から問い直すことである。「研究する」ことは、大学人(など職業)研究者の専売特許ではない。社会人が、多様な仕事や生活の現場において、諸課題と向き合う日々の営みの中にこそある。「研究する」ことの原点も、そこに伏在するといえよう。

仕事と研究のいずれも駆け出しの25歳にとって、理論的に深く理解していたわけではない。直感的に察知したのであろう。そこで提示したのが、「働きつつ学び研究する」(略称・働学研)である。「労働」「学習」を、「働く」「学ぶ」という主体的なキーワードで捉え直し、さらに両者をつなげ、「研究する」へと発展させる道筋を提示したものである。

その後、筆者は、鉄鋼労働者研究者として、また社会人研究者として、自ら率先して実践し試行錯誤しながら先進的なモデルを創造していく。19年後の1992年春、大学に転じてからは、大学人研究者として学生さらに社会人研究者(とくに博士)の育成に力を注ぐ。それぞれのモデルを創造しつつ、理念を検証し、理論とノウハウを深め磨いていった。

## 3 夜間通信研究科と自由大学院の歩みと課題

### 3.1 夜間通信研究科の挑戦と歩み 一労働者研究者の育成をめざして

夜間通信研究科は、1975年に発足し、多くの論文修士を送り出した。2008年までの33年間で、修士論文は87本に上る。1977～82年は48本と活発も、1983～94年32本と次第に難しくなる。開講式は1994年が最後となり、95年以降は7本にとどまる。

その理由は、種々考えられよう。直接的には外部環境の変化が大きかったとみられる。

1つは、1980年代後半から社会人大学院が各大学に設置されていったことである。とくに、京都大学大学院経済学研究科における設置は基礎研に大きなインパクトを及ぼす。夜間通信研究科の先駆性と独自性が、大きく揺り動かされる状況が出現したのである。

2つは、1989年の「ベルリンの壁」崩壊、1990年のソ連邦の解体である。その衝撃は、社会主義の思想と運動、さらにはマルクス経済学への厳しい視線、批判へと波及する。『資本論』と『帝国主義論』の講座を軸とする夜間通信研究科にとって、その衝撃は殊のほか大きかったと推察される。

### 3.2 自由大学院の歩みと課題

そうしたなか、夜間通信科は2004年に自由大学院へと改称する。既成大学院に設置されていく社会人大学院との差別化を図る一方、修士論文の作成指導を重視するという趣旨である。しかし低迷は打開できず、むしろより深刻化する。修士論文は、2006年、2008年各1本を最後に、休業を余儀なくされる。以降は、読書サークル活動の性格を強めていく。

自由大学院の「低迷」については、内部要因にこそ目を向け総括すべし、との指摘もいただいている。「指導」を担う大学研究者の多くが、研究、教育、行政などをめぐる大学内の生存競争に巻き込まれ、基礎研の研究教育支援活動に傾注できなくなっていたとみられる。

この問題提起は極めて重要で、基礎研の理念と政策の核心を突くものとみられる。正面から受けとめ議論するには、勇気と知的謙虚さも欠かせない。「教育支援委員会」（22年4～7月）において繰り返し提起するも、真摯に議論されるには至らなかった。

論文作成支援を通して社会人研究者を育成するという先駆的な活動が、なぜ続かなかつたのか。今日的な視点から、あらためて問わねばなるまい。

### 3.3 「働学研」の活動と理論への視座 一批判とリプライ

この間、「働学研」の活動と理論に対し、基礎研内部から種々の批判が出された。ここでは、2人の自由大学院校長からの批判とわがリプライを紹介する。

1つは、「学」と「研」の区分と統合をめぐる。「“学”と“研”を区別することで、“学”や“研”の意義が損なわれる恐れがある。“学”の中に“研”が含まれているはず」（中村浩爾[2016]）等。2015年規約改正で「働きつつ学び研究する」となり、区分と統合は明記済み。

2つは、仕事と生活を研究することの意味をめぐる。「仕事と生活を研究対象にする」ことに対し、そのような「条件が得られる人は決して多くはないだろう」との指摘である（和田幸子[2021]「書評 十名直喜『人生のロマンと挑戦』『季刊 経済理論』Vol.57 No.4）。

それは、むしろ困難な時ほど大切である。働きながら苦しみや喜びを直視し、その原因を解明して、自分の独自の生き方や働き方につなげる。そうした地道な営み、日々の努力の積み重ねが、自分の潜在能力を引き出していく。少ない時間を活かして働きつつ研究する職人技も体得していく（十名直喜[2022]『サステナビリティの経営哲学』）。AI時代に必要なのは問いを立てる能力である。仕事と研究の二刀流にこそ、それを磨き上げる源泉がある。

## 4 大学人と社会人の研究・教育交流のあり方

### 4.1 「指導」から「支援」への社会的流れ

「指導」を考え直す機運が、日本社会に各分野で高まりつつある。基礎研でも、自由大学院ゼミでは、タテ型・一方向型の「指導」観が当然視されてきた。

「自由大学院のゼミの本質は、主として労働者、市民、学生、院生が、研究者の指導の下に、研究能力を養成すること」。「専門的力量の差から必然的に生じることであり、共同研究を進めるにあたって必要な秩序」（中村浩爾[2016]）

ここでは、「研究者」（＝大学教員）とその他との研究力量の差が、上下「秩序」として固定的に把握されている。両者の関係は、そのようにタテ型・一方向型の関係であろうか。

むしろ、ヨコ型・双方向型の「支援」観こそ、基礎研の原点ではなからうか。大学人と社会人の関係は、「学びあい育ちあう」水平型かつ双方向型の方向がめざされていたはず。

他方、保育から小中高にかけて、研究・教育をめぐる新しい社会的流れがみられる。教師と指導の関係を、タテ型・一方向型から、ヨコ型・双方向型として捉え直す。生徒を対等な人格として捉え、「教育指導」から「教育支援」へのシフトである。

この流れは、基礎研においても大きな流れに転じつつある。基礎研内につくられた「教育指導委員会」は、発足早々2022年4月に「教育支援委員会」（和田まとめ役）へ、さらに2022年12月には「研究教育支援委員会」（大西まとめ役）へと改称する。大学人と社会人研究者を学びあい育ちあう対等な関係として捉え直すに至る。

### 4.2 主体性と双方向型の育成 ―タテ型・一方向型「指導」を超える秘訣

それでは、タテ型・一方向型の「指導」を超える秘訣はどこにあるのか。その秘訣は、大学人、社会人のいずれもが、主体性を取り戻す自己変革と粘り強い実践にある。

社会人は、仕事と生活を見つめ直し研究対象として位置づけ、日々の気づき（疑問、悩み、着想）を書き留め、広げ深めていくことである。大学人は、「指導」という上から目線ではなく、現場の最前線に学びつつ、伴走者として、それを掘り下げていく理論や政策的な助言をしていくことが求められている。

研究者（大学教員など）は、労働者、市民から現場のホットな課題や専門性を、臨場感のなかで学ぶ。労働者や市民は、研究者から古典などの基礎理論を深く学ぶ。そのような学びあい磨き合いの交流を通してこそ、生活感覚あふれる経済学、より広く社会科学の創造が可能になる。基礎研の原点も、そこにあるといえよう。

## 5 基礎研における研究・教育支援への提言

基礎研の原点と理念は、先駆的かつ魅力的で、基礎研の存在意義と強みもここにある。その理念と原点に立ち返り、さらに深く捉え直し、新たな方向性を見出す必要がある。

理念と原点を生かし、さらに発展させていくべく、新3つの柱を提案したい。これまでの議論をふまえ、そのエキスをまとめたものが「新3つの柱」である。

- (1) 自らの労働・生活と向き合い、研究対象として捉え直す
- (2) 学びあい育ちあう水平型・双方向型の交流・支援
- (3) 多様な階層・水準・発達ニーズに応える文化&システムづくり

基礎研内外のゼミ・研究会との交流さらに大学との連携を広げ、多様な発達欲求を発掘し磨きあう良循環を促していく。

社会人研究者の役割と期待は、大きい。自らの研究を広げ深め体系化し、研究推進の担い手へと脱皮していく。各位が関わる産業・地域の各分野の諸課題を解明し、新たな理論や政策を提示する。後進の社会人研究者を育てる。大学人研究者を多様な現場の世界に誘い、大学人との共同研究を通して、新たな研究と分野を切り開いて行く。

自立した創意的な社会人研究者へ脱皮する上で、博士論文は貴重な手がかりとなる。大学教員への道もさることながら、現場の諸問題に切り込む最強の武器となるからである。

## 6 おわりに 一大学人と社会人が学びあう研究ロマン

社会人にとって、論文作成、博士論文仕上げ、単著書出版などは、いずれも至難の大事業である。支援・指導する側にとっても、それなりの覚悟とエネルギーが要る。それと葛藤しながらも、粘り強く取り組んでいると、社会人にいくつかの奇跡が起こってくる。

ある時期に、研究者としての離陸が起こり、難渋していた論文や博論が一気に進み、完成へと向かう。1人の研究が進み出すと、他の人も感化され共鳴するように進み出す(共進化)。ダメかもと思っていた人が覚醒し、博論を仕上げていく(大化け)等々。

名古屋学院大学博士課程十名ゼミ 21年間の手応えとノウハウを継承・発展させ、各分野を理論的・政策的にリードし切り拓いていく社会人研究者、博士を育て社会に送り出したい。定年退職後の「働学研(博論・本づくり)研究会」(2019.7~)も、その思いから発足した。

働学研では、2022年7-9月にライフワーク3冊出版が相次ぎ、高評価を受ける。

濱真理[2022]『市民と行政の協働』に廃棄物資源循環学会の著作賞(23年5月)

支援者の十名直喜[2019]『企業不祥事と日本的経営』に労務理論学会特別賞(23年6月)

ダブル師弟受賞(森岡・十名、濱・十名)。程遠紅・博士論文の本審査申請(23年7月)

学びあい助け合いの切磋琢磨が、画期を呼び込み、新たな物語と奇跡へとつながる。社会人研究者を育てる醍醐味、ロマンを感じる瞬間である。そうした手応えが、大学人・社会人研究者に深い示唆と勇気を与える。